

2018年8月12日

福音書からのメッセージ

わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。（ヨハネによる福音書6章39節）

イエス様はガリラヤからついてきた群衆に対し、「わたしは命のパンである」と語ります。彼らはたった5つのパンと2匹の魚が5000人の人々を満腹させる奇跡を目の当たりにし、イエス様を王にしようとしました。湖の対岸へ舟で移動するイエス様たちを追いかけまわす群衆に対し、イエス様は、「いやいや、あなたがたはよくわかっていない。この世のパンのような朽ちるパンのためにではなく、朽ちることのない命のパンのために働きなさい」と言われます。

さらに「わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである」と言われるイエス様に対して、そこにいたユダヤ人はつぶやき始め、こう言います。「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている」と。

日本語で「つぶやく」と言いますと、「小さい声でひとりごとを言う」という意味です。自分自身に、あるいはすぐそばにいる人にしか聞こえないような声で話す、そのような状況を思い浮かべましょう。しかし聖書に「つぶやく」と訳された言葉の意味は少し違います。この「つぶやく」とは、あからさまに不平や不満を口にすることを意味します。つまりユダヤ人たちはイエス様に明らかに聞こえるような声で不平を言い、騒ぎ出したのです。彼らの不満は、「イエスはヨセフの子」なのに、というところがありました。

イエス様が言った「天からのパン」とい



う言葉を聞いて、ユダヤの人たちは連想する出来事がありました。それは自分たちの先祖がエジプトでの奴隷生活から解放され、

40年間荒れ野をさまよっていたときにマナという天からのパンが彼らを養ったことでした。彼らが知る「天からのパン」は、神さまから与えられるものでした。しかし自分たちがよく知っている人物が、自分は天からのパンだと言う。それが許せなかったし、信じるができなかったのです。ユダヤ人たちは、色眼鏡でイエス様を見ていました。その結果イエス様の言葉を受け入れることができず、本当に大切なものを見失ってしまったのです。

人間的なことが邪魔をして、大切なものが見えなくなってしまう。わたしたちにも経験があると思います。説教者を見ながら、その人の神学生時代、子ども時代、普段持っている主義主張、その人の性別、国籍、年齢、いろんなものが邪魔をして、福音が耳に届いていないことはないでしょうか。福音はこう語られるべき、このような祈りがなされるべき、自分の思いが優先してしまい、それと違うものを受け入れられないとしたら。それはまさに、ユダヤ人のつぶやきと何ら変わらないのではないのでしょうか。イエス様の言葉を素直に喜び、受け入れる者となりましょう。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>